

# 集古会会員と中世典籍類の蒐集・継承について

——在九州会員江藤正澄をめぐる覚書——

牧 野 和 夫

はじめに

集古会初期会員江藤正澄については、考古資料の蒐集研究に功績があったことで知られている。日本考古学の黎明期に足跡を残したことは既に顕彰されている（斎藤忠氏『日本考古学史』（昭和四十九年吉川弘文館）。たとえば、手近な横浜市立中央図書館の所蔵する九州の考古学史にふれた書物にも指摘はあるが、いずれも極端に短い。インターネット検索では、九州大学附属図書館の目録類へ至る一件が検出されるのみである。

集古会の初期会員の多くが日本考古学・人類学の領域に精通していた好古家で、坪井正五郎や発起人の八木契三

郎・大野延太郎などは人類学教室に属し、斯界を領導する立場にあり、例会設立当初は出品類も考古資料が目につくのである（坂野徹氏「好事家の政治学——坪井正五郎と明治期人類学の軌跡——」（『思想』2000、1月号）他）。集古会は草創期人類学会員の「気軽な集まり」として設立されたことは大野延太郎や三村竹清などの思い出で周知のこととがらでもあり、省略する。

昭和十年九月刊集古会例会二百回記念会員名簿『千里相識』には江藤正澄の名を拾えないが、集古会誌掲載の会員名簿をたどると、明治三十六年三月刊『集古会誌』の「地方通常会員」名簿欄に「福岡市簗子町 江藤正澄」とあるのが初出、九州地方では他に「熊本市千及町五六 高木敏雄」を見いだすのみである。明治三十七年三月刊、三十八

年三月刊の同誌に「江藤正澄」の名があり、三十九年五月刊の同誌には、「研究蒐集或は趣味を有する品目を附し」た名簿に「汎く古器を好む 福岡市簀子町 江藤正澄」とあり、「比較神話学 熊本市千及町五六／第五高等学校教授 高木敏雄」に並ぶ。明治四十一年十月・四十四年一月刊同誌名簿にも「江藤正澄」の名は認めるが、明治四十四（一九一）年、七十七歳にて病没する。大正九年二月刊同誌掲載名簿「地方会員九十一名」中に既にその名はなく、大正十年十月刊同誌「地方会員百七名」並びに大正十一年十月刊同誌掲載名簿「地方会員百十七名」中にも江藤の名がないのは、その故である。江藤正澄は、集古会の発会・草創期にやや遅れて会員整備拡大期の明治三十六年頃に入会し、明治四十四（一九一）年、病没するまで会員であったと思われる。昭和十年九月刊『千里相識』には江藤正澄の名は、当然ないことになる。寄稿した形跡もなく、江藤正澄が集古会の会員であることは、従って一般的には知られていないが、在九州の初期会員として典籍蒐集に対する見識の高さにおいて、特筆すべき人物であった。

事実、林若吉宛の葉書も現存し、「東京麹町／36—9—21／后1・20（明治三十六年九月二十一日）」の消印（後掲写真①）で旧知の仲と考えられる内容である。詳細は、別に紹介する予定であるが、葉書末に「三村横尾両君へ御

序に宜敷御伝へ被下云々」とあり文行堂横尾勇之助や三村竹清とも旧知の仲であった。大阪の鹿田静七とも書物購入などを通じて交流を深めていたようである。国学・神職としてのネットワーク、「考古」のネットワークが縦横に張り巡らされた「福岡市簀子町」に居して、資料性の高い古書を収集し、晩年は名古屋の集古会会員奥田抱生の勧めもあって、燐票蒐集に精を出したという。

江藤正澄の年譜としては、正澄の五十周忌に当たる昭和三十五年に「辱知の諸彦」に呈された孔版刷りの『江藤正澄翁略年譜』（筑紫豊編）、同じく五十九回忌に当たる昭和四十四年公刊の筑紫豊氏『秋月が生んだ明治の文化人 江藤正澄の面影』（秋月郷土資料館）が詳細である。

筑紫豊氏は『江藤正澄翁略年譜』の「はじめに」において「好古家、有職家、歴史家、歌人、社会教育家、いずれの方面から見ても、翁は明治時代における文化人として第一等の人物であった」と評している。

初期集古会の会員が、古典籍、とりわけ漢籍（宋版など）や中古・中世（即ち近世以前）の典籍についても強い関心を寄せていたことは知られている。元来「古書」は「考古」の範疇に入る重要な一分野であった。

## 一、『随神屋藏書目録書籍之部』

江藤正澄の旧藏書については、九州大学附属図書館蔵『随神屋藏書目録書籍之部』三冊が、最も参考になる。第一冊の「古今のこと知らんとほりせば、古今の文によらざるべからず」に始まる「書目端かき」の末には、「明治三十九年四月十日福岡市簀子町三十七番地／随神屋のあるし／正七位江藤正澄」とあり、正澄が自ら筆をとり、明治「二十九年」「伊勢徴古館へ数（右傍「七」）千卷（右傍「種」）を奉納し、「三十五年」には「大宰府神社へ」「凡三千種」を納めた後の残りの家藏善本「珍書類」の分類・整理を試みた際の目録と見てよいであろう。

第二冊目（書籍之部）分類の項目は、次の通りである。

「第一古写経／第二古刊経／第三古写本／第四古法帖／第五古図画／第六古横本／第七朝鮮板／第八書籍目六／第九随筆／第十古印譜／第十一古錢譜／第十二神祇書」1・オ

第十三姓氏・人物伝／第十四地誌〔社寺縁起／宝物目六〕／第十五漢籍<sup>字書</sup>／第十六有職書／第十七假字字類／第十八動植物類／第十九武器書／第二十、「と」

第二十迄項目をわけ、「目六終り」と記す。「凡例」とし

て「一此書目録ハ随神書屋中ニ旧藏スル所ノ書籍ノ部ニシテ如何成懇望人ト雖／売買ヲ許サル、ノミカ渾テ門外不出ノ禁本ナリ／一自第一号至六号テ部類スル所ハ更ニ趣旨有二非ス只便宜ノ所ヨリ引出スマ／、記載スルニ拠ル……（以下略）……………」

凡例に拠れば神宮徴古館への奉納以前の明治二十一年（一八八八）一月の作成かと考えられるが、「如何成懇望人ト雖売買ヲ許サ、ルノミカ渾テ門外不出ノ禁本ナリ」とあり、正澄蒐集の善本を著録したものであろう。

とりわけ、中古・中世に係る典籍類が集中する「第一古写経部」「第二古版経巻部」「第三古写本部」を紹介する。

随神屋藏書目録二（010／2／3）

随神屋所藏目録

第一古写経部

「於寧樂骨董家購焉」（頭書。以下同じ「」を附す）

一 法華經玄贊卷第二 本 一冊

大和法隆寺旧藏也天平年間物筆者未詳

「与豊前松本正足氏交換焉」

一 大灌頂經卷第七 一卷

右同寺一切經之印有奥書云○〔次氏三室〕天平三年八月九日

……〔中略〕……

〔從宗像旧神官某氏惠贈〕

一 大宝積經第七十一 一卷

宗像神社旧藏 奥書云 文治五年<sup>乙酉日</sup>西七月廿七日書之

一切經一筆書写行人良祐<sup>已下略</sup> 俗謂宗像田島

一切經者

……〔中略〕……／第二古版經卷部／〔於福岡購求之／濱

南嶺愛藏〕／一法集經卷第六 一折／宋版陳全印造所傳未

詳／〔於南都骨董／家購焉〕／一首楞嚴經九之十 一冊／

東大寺惣持院旧藏松浦北海翁云此經可元板矣／……〔中

略〕……／〔印造陳全について、中尊寺宋版大藏經の開元

寺版刷印時期十二世紀後末期とする〕

〔於南都一骨董舖求之〕

一 円覺經略疏之鈔第一之一二 欠 一冊

奥書云 永仁參年乙未五月十四日書写之畢執筆大

宋園杭州路仁私〔和〕縣居人智恵之海印寺常什物／

……〔中略〕……

一 裴陽石經 一折

是宗像神社境内所存阿弥陀經石也宝曆

六年正月筑前杵宗朗跋文云 相伝治承中内

〔秋月磯氏藏本〕

一 勅脩百丈清規 一冊

大智寿禪寺住持<sup>臣</sup>僧德輝奉勅重編至

元二年序跋有之宇治興聖寺旧藏

天正八年霜月自書之云々 卷中書入可別

人一層有時代矣

……〔中略〕……／第三古写本部附近世家写本／……

〔中略〕……

〔秋月磯氏旧藏同上〕

一 論語義疏 拾冊

奥書无才コト点付之可鎌倉末年物靖曠子○〔朱〕印捺

焉重訂識者矣

……〔中略〕……

〔秋月磯氏旧藏購得之〕

一 尚書

宇治興正寺旧藏奥書无之室町○〔末〕年代物

〔同上〕

一 古文孝經

同藏才コト点付之奥書无之同筆也

〔同上〕

一 大学

同藏同点付之奥書此本加一見朱墨兩方点無相違頗可謂証本矣文龜第三卯月初十清

三位入道常益中略次永正二年五月十九日左大史

小槻宿禰判以故入道証明之点本被遂其功說〔訖歟〕寔為後葉龜鏡而已給事中宣賢判以同筆改之

元龜天正年間之写本也

……（中略）……

〔明治八年十月於奈良骨董家購得焉〕

一 太平記 三十六冊

奥書云本云弘治三年臘月中旬於舜照半佐

之蝸舍写独清再治之鴻書□（乞）下略法印弁叡記

之永祿三年仲冬下旬索林学士以□□〔古写〕本不違

片画書写給畢下略法印証之長野誠翁

云此本玄慧法印之旧本○〔之〕儘写者常無之珍書云々

〔秋月磯氏旧藏同上〕

一 周易 二冊

宇治興正寺旧藏右与尚書大学等同写本

〔同上〕

一 黄石公三略

同寺藏元奥書

……（中略）……

〔秋月磯氏旧藏同上〕

一 胡曾詩抄

奥書云永正十年紀伊無漏之郡北山莊長禪寺

謝璞是亦宇治興正寺旧藏也

……（中略）……

〔秋月磯氏旧藏同上〕

一 論語何公集解 四冊

奥書云此書文增減字異同多共以不一同以唐

本欲決之未求得之專以当家古本取準的書写之

卒終朱墨功訖 永正九年二月九日少納言清原朝臣判

文字增減年來不審以数多家本雖令校合其以不

一揆爰唐本不慮感得之間即校正之處相違非

一但古本之躰今非可改易仍昭注之兩存焉就家

說於無害之文字者以朱消之是又非憶說黃

表紙家本如此類有之後朱以此本可為証本者乎

永正十七年九月廿三日 給事中清原宣賢此本亦

宇治興正寺旧藏也可珍重物

〔同上〕

一 禪儀外文集 一冊

奥書云延文丁酉秋登公写之耳烏焉帝

虎吾奈之〔誤〕以俟識者斤正矣 肯堂尚出

宇治興正寺旧藏本也

近くは博多の骨董店、時に足を伸ばして東京・奈良・京都の骨董古書店で購入したり、同好の士との交換などで収蔵した典籍であり、その注記から判断するに、典籍の新旧・内容などに関する確な観察が随所に示され、古書に対する相当の知識の蓄積があったものと思われる。多くが神宮文庫・神宮徴古館に収まったものである。

蒐集資料は、いわゆる「名物」ではなく（この点が、後代の研究者の看過してきた理由のひとつであろう）、資料的価値の高い、「考古」に適うものが多く、中世文化・文学の方面から俯瞰するとき、飛躍的な研究の進展をみた一九八〇年代以降に活用をみたものが少なくないことと関連すると考える。

## 二、江藤文庫本と中世（文学・文化）研究

中世文学研究の進展に多大な影響を与えた江藤正澄旧蔵の典籍資料として、既に全面的な紹介がなされた一、二を挙げるならば、第一に「奥書云永正十年紀伊無漏之郡北山莊長禪寺／是亦宇治興正寺旧蔵也」とある「胡曾詩抄」

であろう。

黒田彰編『胡曾詩抄』（一九八八年二月、三弥井書店）

によると、玄恵法印作と伝える『胡曾詩注』は「胡曾詩抄」ともいい、一九八八年当時の中世文学研究の視界に入ることのない書物のひとつで「その室町文芸に与えた影響は決して小さくなかったものと思われるが、これまで殆んど顧みられたことがなかった」という。伝本については黒田氏著書に譲る。神宮本が古鈔本で善本と考えられ、当該書の翻刻底本に撰定された。簡略に書誌事項を次のように記している。「神宮文庫蔵 外題打付書『胡曾詠史詩一（二）』（後補横刷毛目表紙、内題尾題「胡曾詠史詩」一冊のみ。地に「胡曾詩抄上（下）」とあり。後見返、袋綴楮紙、永正十（一五一三）年写二冊、「縦二五・七糎横一八・〇糎、二十九丁及び、三十五丁（墨付同）、裏打修補される。第一冊は「云々亭」までを収める。奥書に、昔三国一山之源恵法印」と言い、その下に「欣管」識語と「古経堂」陰刻朱印がある。第一・二冊一丁表に「神宮文庫」「江藤文庫」「興聖寺公用」の朱印を捺す。」（P. 16）と。本目録によって、新たに「秋月磯氏旧蔵」で更に「是亦宇治興正寺旧蔵也」という情報が得られることになる。

第二には「奥書云本云弘治三年臘月中旬……」とある三十六冊の「太平記」である。既に『神宮徴古館本 太平

記」(一九九四年二月 和泉書院刊)に翻刻され、周到な解題が附されている。少々長いが解題を引文しておく。

「本書は明治中期に神宮の奉賛団体であった神苑会が、神宮徴古館の開設にあたって、当時福岡県に隠棲していた、広瀬神社(奈良県)の元神官江藤正澄から一括入手した、江藤文庫本の一である。正澄が本書を奈良で購入した経緯については、正澄自身、巻四十の巻末の識語で次のように記している。

右古写本太平記三拾六卷(全本四十巻卷今脱十／十五廿三廿四合五)

巻者 明治八年十月既望 於南都一骨董

家 価得之距今三百拾六稔案可謂奇

世之珍書矣 後裔勿忽緒焉云爾

広瀬広瀬神社

大宮司正七位

江 藤 正 澄

因云從弘治元年至永祿三年其間四年也 印(「江藤／正澄」)

広瀬は広瀬と同じである。江藤文庫本は神宮文庫に漢籍の善本数部が蔵され(長澤規矩也編『神宮文庫漢籍善本解題』(1973年3月汲古書院刊)参照)、神宮徴古館には『太平記』の他には、『古文尚書』(慶長古活字本)・『新葉

集』(江戸初期写、三冊)・『和漢朗詠集』(鎌倉末室町初期写、下巻のみ)・『文正草子』(室町末写、下巻のみ)など八本が現蔵されているにとどまるが、何れも善本である。」

と自筆識語を紹介し、江藤正澄がその蔵書を神宮文庫へ献納するに至る経緯を含めて、

「江藤正澄は天保七(一八三六)年、筑前国夜須郡(現在の福岡県甘木市)に秋月藩士上野忠右衛門の二男として生まれ、長じて同藩の医師江藤良禎の養子となった。以後正澄は勤皇の志士として維新前後の動乱を体験し、明治政府によって太宰府神社大宮司・大和の丹生川神社大宮司・広瀬神社大宮司に任命され神道家として生きた。右の識語に見える広瀬神社の大宮司を拝命したのは明治七(一八七四)年四月、三十九歳の時であった。明治十年、父の大患・急逝により職を辞し帰郷、以後は官途に就かず福岡に住み、一万五千余冊と言われた膨大な蔵書を元手に古本屋を営み、併せて考古資料的出土品等の古物を商い生計を立てた。正澄は筑前鉄工会所を開設したが負債を生じ、ために年来の蒐集品が差押を受けそうになるとその散佚を憂え、行李二百梱包にも及ぶ物品・書籍を神宮徴古館へ奉納した。明治二十九(一八九六)年十二月のことで

ある（『随神屋蔵書目録一』序文）。と記す。

更に小倉に赴任した森鷗外との交流のエピソードを挟んで、明治四十四（一九一）年病没に及ぶ、七十七歳の生涯に言及したが、「筆まめであつた彼の自筆稿本の多くは昭和十六（一九四）年に遺族の手によつて九州大学附属図書館に寄贈され、江藤文庫として現存する」ことにふれて「その中に収められる『随神屋蔵書目録』（010ス3）は書名・冊数のみならず、書写年代・奥書・識語・入手先等の覚書も具備し、簡略な書目解題とも言える」と評し、明治初期の書籍蒐集における江藤の功績を顕彰した。序文に従えば明治二十一（一八八八）年二月の作成と思われる。「因にその「第三古写本部附近世家写本」に載る書名を列挙」して、大方の注意を喚起された。

## 「二 太平記」

三十六冊

奥書云弘治元年臘月中旬於寂照半作

之蝸舎写独清再治之鴻書凡下略法印弁叡記

之永祿三年仲冬下旬索林学士以古写本不違

片画書写給畢下略法印証之長野誠翁

云此本玄慧法印之旧本之儘写者常無之珍書云々

前半は現存徴古館本の奥書（後掲）の抄出であるが、傍線部はこの『随神屋蔵書目録』のみに見える文言で、長野誠翁云はく、此本玄慧法印の旧本の儘写す者れば常にこれ無き珍書と云々。

と読め、長野翁が本書の価値を認めたという意であろう。長野誠（一八〇七〜一八九一）は福岡藩の儒官で廃藩以後は郷土史の研究につとめ『閩史筌蹄』四十三巻の大著がある。なお右の引用文の欄上に、明治八年十月於奈良骨董家購得焉

と注記があり、先掲の正澄識の記述に符合する。以上が本書の旧蔵者江藤正澄についてである。」

次に巻末の「欣賞」の墨書ならびにその下の朱文方形印「古経／堂」について「浄土宗管長で知恩院七十五世住職であり、図書字に通じていた養飼徹定（一八一四〜九一）のもの」とし、長澤規矩也編『神宮文庫漢籍善本目録』の推測「徹定が福岡在住の江藤家で観書の際に加へたもの」を引用し、さらに注して「（4）牧田諦亮「徹定上人年譜稿」（『仏教文化研究』14号、一九六八年三月）に拠れば、徹定は明治二十二（一八八八）年一月から二月にかけて九州に赴き布教につとめており（七十五歳の年）、あるいはこの時正澄に会したのであろうか」と考証を加えている。



簡要にして周到な解題であり、加えるべきものはない。蛇足として附記するならば、正澄自筆の『遺憾録』全二十八項中には「廿一 智恩院徹定門主ト交換品印支那古銭五六之事」「廿四 徹定門主狩谷掖齋ノ自筆ノ古京遺文一冊貸置名古屋ニテ入滅紛失セシ事」とあり、その交流の深甚なことがうかがわれる点である（筑紫豊氏『江藤正澄の面影』、昭和四十四年十一月）。

## 二、『寧楽（奈良）雑纂』・『江藤家蔵物品目録』の紹介

以下に「明治七年十一月至九年三月」「明治九年七月成」を合綴する「寧楽雑纂」一冊より抜抄する。その書誌の事項を簡略に記す。

香色後補表紙（二四・三×一五・九糎）左肩墨単杵書題簽「寧楽雑纂」と墨書。後補遊紙一丁、扉紙、左肩より「奈良雜纂（明治八年一月／第壹）」と墨書。2・オより目次「寧楽雜纂目六 明治八年一月ヨリ三月迄／長谷寺蜜奏記 東大寺三蔵古物摸図序跋目六／長谷寺縁起文附録・書翰 細々要記（興福寺蔵／貞和三年）／…／…」である。

78オ（朱）「○大橋長熹所蔵日本書紀〔神代／卷下〕奥書

明治九年五月三十日於南都神道分局／以大橋氏之本謄写了江藤正澄」／

○山田本奥書云 元和二十一朱墨点了／

本云乾元三年閏四月廿一日（五月四日点了七日交了／以累家之本書写訖）／嘉元二年林鐘十日合私記了／同月廿五日拭珠汗書神名訖／

元応第二曆仲呂廿九月授兼豊訖兼夏 正四

位上行神祇權左副卜部兼一判／…／…

○仙石政和類聚国史考異〔文化十二年ニヨリテ〕批校之目：…／…（略）…

79ウ「…／…／文政五壬午年正月以信自校本校了／

又以寛文丁未仲秋之活字本校之 伴信友」

80オ（朱）「伴翁ノ本イトワロシ今原本ヲ借得テ校合ノツ

イテニ卷首半面ト奥書トヲ臨シツコノ本ハ今ハ／故アリテ六人部是香宿禰ノ藏本トナレリ」

現在の所蔵先への関心は深く、落ち着き先を「六人部是香」（京都六人部神社の神職、国学者）と確認している。その職に係る「情報網」を十分に活用しえたことを証する一例であろう。

82オ「一〇」(朱) 二中暦〔第二〇〕第六迄」(朱)「元一

乘院坊官復飾本條時乘家藏／

(朱)「奥書」

弘治二年丁巳十二月六七両日際写之写本：／／／

權僧正実暁 〔廿九／三十一〕

歴史民俗博物館蔵『二中歴』(影印刊行 八木書店) 参照。

実暁については、牧野『日本中世の説話・書物のネット

ワーク』(2009・12和泉書院刊) 参照

83ウ 善財童子画卷一軸〔絵鳥羽僧正／詞寂蓮法師〕ト云

集古会会員相見香雨の宋版『仏國禪師文殊指南図讃』など

についての知識〔『相見香雨集』所収 青裳堂〕参照。

84オ「蘇悉地経卷中／(朱)「奥書云」／

皇后藤原氏光明子奉為／／／／／天平十二年五月一

日記／

・佛説中心経奥書同上／

文集卷第四 正応二年己丑七月十六日書写了

厳祐伝」

84ウ(朱)「白氏」

・ 文集卷第三 新樂府上 一冊／

(朱)「奥書云」

・ 寛元元年癸卯二月廿三日於蓮花寺北房書写了／

・ 故王篇殘缺 五葉(朱)「道鏡写伝」／／／／／

85オ「文集卷第四 一卷／

(朱)「奥書云」

「嘉禎二二年〔歳次／戊戌〕八月十九日午時書

写了／

大和国十市郡葉王寺住人捨身求／菩提□

執筆淨田蓮勝房生年／廿八俟為興法

利生廣作仏事者也／極楽トオモウハカリソ

ミタホトケ／ウルヒトコトニツミヲネスセヨ」

「寧樂雜纂 四 完」〔昭和6・10・20〕受入「江藤慶三

郎寄贈」(604・ナ・1)についても少々抜抄しておく。簡

略な書誌事項は、

①香色表紙(27。3×19。0 cm)、左肩、单杵題簽「寧樂雜

纂 四完」と墨書。

見返・遊紙(後補二丁)

③扉紙左肩打付「寧樂雜纂 第貳號」／

(朱)「乙號 番外 第貳」と墨書。右下方「江藤慶

三郎(墨書)寄贈」と青色スタンプ印。

扉紙中央「昭和6・10・20」の受入スタンプ。

④ いづれも各個に模写蒐集したものを後に一冊に綴じたもの。

治安元年八月廿八日以石泉御本写之早

康平六年七月廿於平<sup>本</sup>院□□□□

佛子快算

1オ「卷式目錄／官幣大社神殿拜殿図三葉 古印

四種一葉／神前額図一葉 四濱磬図一葉／

上代服制考図〔蛭川式胤／一葉〕 女帝御宝冠図一葉／

顧野王玉篇摸本〔石山寺経藏本今／秋月故磯淳現藏〕二

葉 正平版論語摸本〔秋月磯氏／現藏〕一葉和漢朗詠集

摸本〔鎌倉年代物／今随神屋藏〕一葉 朝鮮板呂宇治卿約

同上藏 一葉／

筑後吉井若宮八幡古器図 一葉 長祿二年武州江戸図

一葉／

明治四 東京博覧会緒言 一葉 菅家紅梅指図 二葉／

豪猪図 一葉 名護屋金鯢<sup>シヤチ</sup>図／…／…／…

10オ「朱・墨交り」顧野王玉篇缺卷 <sup>説書</sup>〔竹恵反尔

雅誣諉□（）郭璞／曰以事相属梁為誣也〕

「朱・墨交り」「表」

誣〔女恵反…／蔡謨曰諉託…〕

「裏」

金剛界私記一卷

10ウ書影鈔玉篇古本後／影鈔梁顧野王玉篇若干卷注文多於

今行諸本

蓋梁代原本彼佚而我存者歟但其缺佚不完為可惜／而觀

斑窺豹又可弥也余嘗謂海西之邦屢…更新

即廢古以赴今至…／…／…／甲午重陽後二日 林衡識

／□□／

玉篇卷第廿七

〔同七部／四百廿二字〕／…／…／…

11オ「…／…／文化五年九月 主□源常（）嚮摺／…

／…／…」

11ウ「石山寺経藏」／…／…／…」

12オ

經ト本文ハ版／假字ハ後ニ書／加エタルモノ也

論語先進第十一 何晏集解〔凡二十／三章〕

子曰先進於礼樂 野人也後進於／

(四行分移写あるも省略)

12ウ

正平甲辰五月七日謹誌／

論語卷第十(經一千二百二十三字／注一千一百七十五字)

右論語同刻者世有三本

.....

明和紀元之冬 平安平敬通伯敷謹識

13オ 和漢朗詠集下／ 松／ 四行／

13ウ 帝王 付法皇／なにわつにさくやこの花

：／：／ちりぬれはまたくる春はさきぬめり／：／

磯氏所藏／凡五百年以上のものといふ紙は薄

様なり／

江藤正澄摸写

604・ナ・1 ① 第四卷(第二冊目)

14オ 朱子増損呂氏郷約(伊羅)／

同郷之約四<sup>伊</sup>尼<sup>伊</sup>一曰：

14ウ 授其次：

..... (中略) .....

쥬스어더으며딜며흔

..... (中略) .....

奥二月旦集会読約之図アリ／

右朝鮮版一卷

磯淳藏本

江藤正澄摸写

以下は『江藤家蔵物品目録』一冊に拠る。『江藤家蔵物品目録』一冊の簡略な書誌事項を記す。

香色布目七宝繫後補表紙(二八・一×一二・四釐)、左肩に単粹書題簽「江藤家蔵物品目録完」と墨書。遊紙前三丁、1・オ右下に「江藤文庫」(双粹朱文印)。その凡例を示す。「凡例／一此珍藏目六ハ正澄三十有余年間見聞ニ從ヒ蒐集スル所ニシ／テ其數凡幾千ナルヲシラズ中ニハ古今ノ等差ト雅俗ノ混淆トノナキニシモ／アラサレド此目次ニハ古雅ナル珍品ヲ撰ヒ鄰近ナル俗物ヲハ省ケリ／一此書中渾テ種類ヲ區別シテ十二門トス是ハ看官ノ搜索ニ便シ展／閱スルニ倦サランコトヲ厭ヘハナリ／一所謂十二門トハ第一石器第二陶器第三金器第四木器第五／経卷第六書籍第七画図第八法帖第九神仏像第十観古室／古材第十一庭上品物第十二雜品ナリ」

一現今三室ニ陳列スル所ハ玉石錯雜シテ區別判然ナラサ

ルモノ尠トセ／ス侘日泰西ノ動植物又ハ地質學士等ニ諷リ  
テ博物會場ノ体裁／ニ模擬セント欲スルナリ／一物品ノ出  
所明瞭ナル限りハ下層ノ之ヲ記載シ傍ラ時代製造精／粗○  
〔ノ〕考案□クモノヲモ添附シタルハ後進晩達ノ徒ニ其大  
概ヲ知ラシメン為／ノ婆心ノミ／

明治二十一年七月念七日 編輯者亦識／

〔朱〕「明治二十三年七月修補之」  
と

「第一石器部」の首を示せば、

6オ「〔朱〕「第／壹」 石器部 按ニ石工ハ神代ヨリ  
アリ：／：／

〔黒川真頼／一冊〕工芸志料  
〔同上／二冊〕日本石器  
考〔神田／孝平〕〔図共／二  
冊〕人類学会〔東京本局／毎月  
出版〕参看スベシ

〔朱〕「第一番」

一 石劍 一口

長七寸五歩巾柄頭二寸一步：」の如くである。  
部類分けは次の通りである。下に丁数を示す。

石器部 6オ／10ウ

陶器部 7オ／13オ、14オ／16ウ白紙

金器部 17オ／23オ

木器部 24オ／28オ、29オ／32ウ白紙

「第六 書籍部」の首を示す。

〔朱〕「第六」書籍部

33オ「〔朱〕「第六」書籍部／一和漢朗詠集<sup>上巻缺</sup> 下一  
冊／

鳥ノ子紙ノ表裏〔俗云大／和綴〕上代様ニテ写シオ  
コト点ヲ朱ニテ附ス

鎌倉年代／ノモノナリ奥書ナシ可惜コトナリ／

一 古今和歌集 大形本 全二冊／

一 趙氏孟子〔金沢文庫本／有黒印〕全四冊／

此本鎌倉ノ末年金沢越後守〔空白〕カ武州〔空白〕郡金沢  
ニ文庫ヲ建テ儒仏ノ書ヲ蒐／

集シタル中ノ一種ナリ

とあり、33・ウ／37・ウまで白紙。更に、38・オから

「第七 畫図部」があり、38・ウ／45・ウまで白紙。46・

オ「二十四 古錢箱」と続く。50・ウ白紙。51・オから

「〔朱〕第五 経卷部」が始まる。経卷部著録のすべてを

翻字しておく。『随神屋蔵書目録』に著録のもの多し。

51オ「(朱) 第五 経巻部」

一 法華玄賛巻第二本 一冊

大和国平群郡○〔法隆寺〕旧蔵也本文用<sub>レ</sub>朱書賛用<sub>レ</sub>墨書原巻軸ナルヲ中古綴本ノ体ニ変セリ按天平年間之写経无疑者ナリ寧樂骨董家ニテ明治八年ノ中購之

一大灌頂経巻第七 一卷

右同寺一切経蔵中之一奥書云天平三年八月九日豊前国ノ豊津人松本正足ト交換シテ得ル所ナリ筆者当時ノ写経生ナリ

一 称讃浄土経 一卷

大和国葛下郡當麻寺ノ奥院ノ所伝ナリ筆者中将法女前知恩ノ院門主徹定人人ノ説ニ法女在世中心願ニヨリテ一千部ノ此経巻ヲ謄ノ写スト是其一ナリ明治九年六月於奈良買得之

51ウ「大般若経巻第二百三十二 一卷

大和国薬師寺八幡宮ノ墨印ヲ捺ス按天平年間ノ写経ナリ明治八年ノ於寧樂骨董舖買得焉

一同経 一百三十九 一卷

同蔵経ナリ年序ヲ経ル中紛失セシヲ以テ写シ継キタルモノト見ユル延暦前後ノモノナルベシ

一 古写経 法華経歟 前後缺 一卷

此経巻明朝毛上絹〔巾ノ尺〕二経ヲ引キテ一行二十字詰

ニ写セシモノ也ノ筆跡ハ啻ナラズ或ハ支那人ニテモアルベシ奥書云

自遍智院親王奉傳領之 法印権大僧都弘尊ノ

明治二十三年九月十四日□〔宮〕本量方買取なり博多某ヨリ之買得タルモノト云ノ重テ可<sub>レ</sub>調事也

52オ「神仏像ノノノ」

以下殆ど白紙 ところどころ墨書あり「庭上品物」などと記す。

以上、『随神屋蔵書目録書籍之部』『寧樂(奈良) 雑纂』

『江藤家蔵物品目録』電覧の心覚えとして処々の抜き書きを随意に記述したが、その質量において明治期の九州における蔵書家として特筆されるべき存在であることはほぼ確実である。しかも、2010年現在、今後も有用な資料として活用すべき記述を多く含むものである。

一例を挙げておきたい。『随神屋所蔵目録』『第一古写経部』に著録を見る一点、

「南都一骨董舖求之

一 円覚経略疏之鈔第一之二 欠 一冊

奥書云 永仁参年乙未五月十四日書写之畢執筆大

宋圀杭州路仁私縣居人智恵之海印寺常什物ノ

とある『円覚経略疏之鈔』第一之二 一冊である。

この宋人智恵については、先行論文として大屋徳城「叡山版について」(『著作集』第三卷所収)、納富常天『金沢文庫資料の研究稀観資料篇』(法蔵館、1995年7月)、横内裕人「久米田寺の唐人—宗人書生と真言律宗」(『アジア遊学』132号、勉誠出版、2010年5月)があり、次の点が解明されている。

智恵の手に係る写本として金沢文庫保管称名寺蔵(鎌倉時代後期)写『大方広仏華嚴經随疏演義鈔』(以下『演義鈔』)計三十三帖と同蔵『大方広仏華嚴經疏』(以下『華嚴經疏』)計十四帖が現存している。大東急記念文庫蔵『演義鈔』巻第十六の一帖は智恵の手になるもので、称名寺から流出した聖教と考えられる。納富氏によると、他に『華嚴經』・『円覚經略疏之鈔』も智恵の手に係ることが知られる。

『華嚴經』(鎌倉某氏所蔵)巻第二の尾に「永仁三年乙未十二月 日 於泉州久米多寺書写畢 執筆唐人智恵」とあり、僚卷の所在は明らかでないが、宋人智恵によって『華嚴經』が書写されたことがわかる。

また『円覚經略疏之鈔』(成實堂文庫蔵)巻三之一の尾に「永仁四年丙申六月五日於泉州久米多寺書写之畢 執筆唐人智恵」とあり、僚卷の所在は不明であるが、智恵における経論書写の実情から、独力で書写したものと思われる。

る。

と記述されたが、ここに『随神屋所蔵目録』に基づき『円覚經略疏之鈔』の「巻第一之二」の存したことが知られ、奥書に「永仁參年乙未五月十四日書写之畢執筆大／宋園(?) 杭州路仁私縣居人智慧之海印寺常什物」

とある新知見を得たことになる。明治初期、金沢文庫旧蔵本が、「南都一骨董舖」で購入され九州博多にもたらされていたことは、注目されることである。更に留意すべき記述が「大／宋園(?) 杭州路仁私縣居人智慧之」と「海印寺常什物」の二点である。納富氏は

『華嚴演義鈔』は十九卷三十三冊残存し、非常に端麗な書体であるが、その巻第十一下尾に「本云、寿昌元年乙亥歳、高麗国大興王寺、奉宣彫、永仁三年乙未十一月九日、於泉州久米多寺書写畢、執筆大唐国行在臨安府小堰門保安橋居洪三官人書一校了」、巻第十五下の尾に「本云、寿昌元年乙亥歳、高麗国大興王寺、奉宣彫造、永仁四年申二月七日、於泉州久米多寺書写、執筆唐人 智恵」とあり、高麗版により、永仁三年(一二九五)十一月九日および永仁四年二月七日久米多寺において洪三官人と智恵が書写していることが知られるが、この洪三官人はその筆跡から智恵のことと思われる。」

とし洪三官人を智恵と同一人物とされた。横内氏は、さ

らに展開して

「南宋の首都であった『行在臨安府』（杭州）に居住していた官人洪三が、永仁三年十一月廿九日以降に久米田寺で出家してその名を智恵に改めたものと思われる。」

として「永仁三年十一月」以降の出家、「智恵」は出家後の名としたのである。『随神屋所蔵目録』に基づく『円覚経略疏之鈔』『卷第一之二』奥書に拠って「永仁参年乙未五月」時点で既に「智慧」と号していたことが判明した。これが一点である。今ひとつの点は「海印寺常住什物」という注記である。どの時点の注記なのか、不詳であるが、『大方広仏華嚴経疏』卷第十一下尾や卷第十五下尾に「寿昌元年乙亥歳、高麗国大興王寺、奉宣彫」とあることを承知していたものの手に係る注記か、と思われる。今後の課題である。

ちなみに成實堂文庫蔵『円覚経略疏之鈔』卷三之一の僚卷である『円覚経略疏之鈔』卷三之二の前欠一帖を家蔵するので、簡略な書誌を記しておく（後掲写真②参照）。

#### 円覚経略疏之鈔

永仁四年 釈智恵写（前欠）

大一帖

紺布貼りボール紙帙入り、左肩より帙題簽「円覚経略疏之鈔 残簡」と墨書。

前表紙欠、後表紙（あるいは原後見返しか）有、本文前欠、本文初行以下「四也無為存生滅開者準論生滅門中亦有真如猶如／湿中不必波動波動中則必有……」と。本文料紙大さ、縦二七・四×横一七・三糎。粘葉装両面書、界線有無不明。字面高さ約二一・五糎。每半葉、七行々二十一乃至三十二字、全八丁、墨付七丁、7・才尾題「円覚経略疏之鈔卷第三之二」と本文同筆墨書。7・ウ書写奥書「永仁四年（丙／申）六月九日於泉州久米多寺書写畢／（8字空）執筆 唐人 智恵」と。本文共紙後表紙糊代に「卅二丁」と墨書。従って、前廿七丁（紙）欠。

#### 三、むすび — 秋月磯氏旧蔵本 —

明治三十年代以降の集古会を考えると、集古会誌上に文章もなく例会に出品もしていない江藤正澄の存在は重要である。集古会例会・『集古会誌』のいずれにもその痕跡を認めることのできない、名簿に名を残すばかりの地方趣味家（いわゆる「購読会員」「幽霊会員」）が、幕末・明治書誌学の名著『古経題跋』選者の古経堂主人養飼徹定や小倉滯在中の森陽外の訪書をうけ、更にその蔵書の富は遙かに聞こえて史料編纂所の久米・黒板の九州訪書の訪問先のひとつにもなったのである。



集古会という明治期に張り巡らされたひとつの網目を介した林・三村・横尾・鹿田という近代書誌学の先駆者との交流を通して、書誌情報・典籍蒐集において殆ど最先端と云ってよい知見を得ていたのである。明治期の奈良において既に『長谷寺密奏記』の採訪時、詳細に本文を採録し、また、史料編纂所の謄写本を転写していわゆる「博多日記」を自らの考証に活用しているなど、資料から研究考証、考証から資料へ、という循環サイクルを研究の基本においていたことが知られる。

その江藤正澄の蒐集に関して看過し得ない一点は、江藤の蔵書に占めた「秋月磯氏」旧蔵本の重さについてである。前節「胡曾詩鈔」の記述で、「秋月磯氏蔵本」という新しい知見を示したが、今、『寧楽雜纂』『随神屋蔵書目録』に拠り、秋月磯氏旧蔵本を列記するならば、

「寧楽雜纂 四 完」には「目録」に

「顧野王玉篇摸本〔石山寺経蔵本今／秋月故磯淳現蔵〕二葉 正平版論語摸本〔秋月磯氏／現蔵〕一葉

和漢朗詠集摸本〔鎌倉年代物／今随神屋蔵〕一葉 朝鮮板

呂字氏卿約 同上蔵 一葉」

とある。「顧野王玉篇摸本〔石山寺経蔵本今／秋月故磯淳現蔵〕」などの記述は注目すべきである（田中光顕など）が、「和漢朗詠集摸本〔鎌倉年代物／今随神屋蔵〕」も、

「13才 和漢朗詠集下／松／ 四行／

13ウ 帝王 付法皇／なにわつにさくやこの花

∴／∴／ちりぬれはまたくる春はさきぬめり／∴／  
磯氏所蔵／凡五百年以上のものといふ紙は薄  
様なり／

とあり、模本作成時「磯氏所蔵」であつたことがわかる。

「14才 朱子増損呂氏郷約〔伊羅〕／

……（略）……

右朝鮮版一卷 磯淳蔵本」

とある。

随神屋蔵書目録二（010／2／3）より拾うならば、

秋月磯氏蔵本

一 勅脩百丈清規 一冊

秋月磯氏蔵同上

一 論語義疏 拾冊

秋月磯氏旧蔵購得之

一 尚書

同上

一 古文孝經

同上

一 大学

秋月磯氏旧蔵同上

一 周易 二冊

宇治興正寺旧蔵右与尚書大学等同写本

同上

一 黄石公三略

秋月磯氏旧蔵同上

一 胡曾詩抄

秋月磯氏旧蔵同上

一 論語 何晏集解 四冊

同上

一 禪儀外文集 一冊

と列記することができる。

漢籍の多くが長澤規矩也編『神宮文庫漢籍善本解題』に  
解題を附して著録される。すなわち、江藤正澄が秋月磯氏

所蔵の典籍類を購入していることは、特に注目されねばならない。長澤氏をして「今次調査の第一回の際に之を普通書中から発見したときの予の喜は筆紙に尽し難きものがあり」と嘆息せしめた南北朝覆宋刊『爾雅』三卷などをも加えて、この「秋月香風／樓磯氏印」「興聖寺公用」の印や『随神書屋目録』の注記「秋月磯氏蔵本」「故磯淳現蔵」に關しては留意すべき略年譜記事があるので、引いておく。

筑紫豊氏『秋月が生んだ明治の文化人 江藤正澄の面影』  
（秋月郷土資料館）所収「随神書屋主江藤正澄略伝草稿（明治二十二年脱稿、三十九年増補）」に拠れば正澄は、京都へ上ること多く、安政三年（一八五六）二月二十一日、金毘羅参詣、三月三日に京都内裏雛合を觀、伊勢内外参詣、帰途大和を巡り、四月十日に帰国を初度として、万延元年（二八六〇）三月九日、書籍調のため上京、二十四日着京、三十日離京、閏三月九日に帰国したのを二度目とする。勤王家としての活動の最中、明治二年六月六日、甲斐よりの帰国の途次、入京し、「京の大学校大助教磯淳・公用人江藤東一郎に会ふ。淳は素、正澄の素読の師たるを以て……」とあるのは本人の証言として貴重である。熊本神風連の乱に呼応して蜂起したことで知られる秋月の乱の渦中のひとり、秋月藩の磯淳が、江藤の「素読の師」であったのである。『胡曾詩抄』を始めとした漢籍類は、「宇治興聖寺

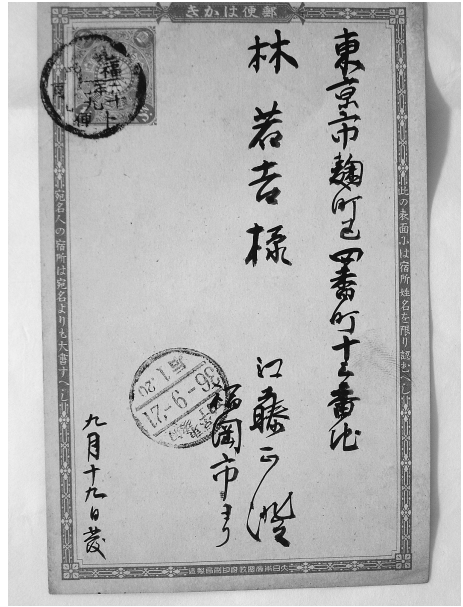


写真1 林若吉宛江藤正澄ハガキ表

旧蔵」の典籍を「京の大学校大助教」であった秋月藩の磯淳がおそらく京都で蒐集したもので、江藤の蒐集の功績のある部分は幼少時の師「磯淳」に譲るべき性格をもっていたようである。

すべて今後の課題である。

本稿は、平成二十二年度科学研究費（挑戦的萌芽研究）課題番号20652018「趣味家集団「集古会」が近代の中世（文学）研究の生成に与えた影響についての研究」に基づく成果である。

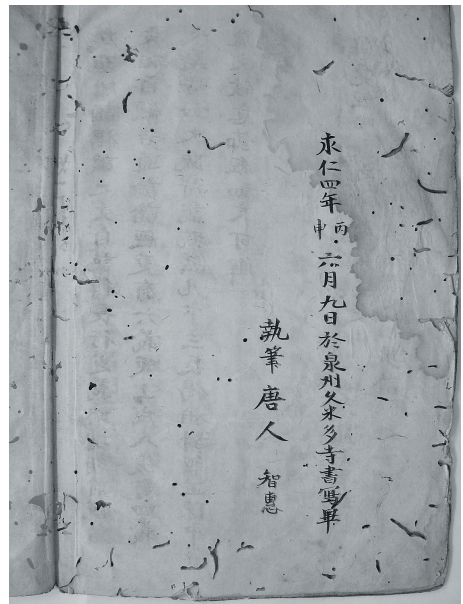


写真2 『円覚経略疏之鈔』卷第一之二書写奥書

資料閲覧・部分引用の御許可を頂いた九州大学附属図書館当局に厚くお礼申し上げます。また、江藤正澄の資料に関しては宗像大社神宝館河窪奈津子・重住真貴子の両氏に多大なご教示を頂いた。記して謝意を表する次第である。

#### 〈追記〉

二〇一〇年八月二〇日、IAHR（於トロント大学）において「Tendai Dangisho (Seminary Temples) and the Late 13th Century Higashiyama Byakugo-in Ared—From the Perspective of Text Networks—」と題した報告を行った。東山

白毫院と小川宝菩提院の交流を「東山〔文物〕交流圏」と称すべき「地域」（安居院や靈山院）として考え、良含や元東寺阿闍梨の澄豪の伝授受の年譜に辿り返したものである。比叡山における宋人「書生」の活躍に多少ふれたが、本稿の「智恵」をも加え、改めて考察を試みる予定。また、西山宝菩提院は、西山法華〔山〕寺と近接した「西山〔文物〕交流圏」にあり、成菩提院蔵の「智満寺旧藏法華寺通蔵」鎌倉前中期書写「台密」聖教類も、そうしたルートを經由した可能性を視野の一角に容れるべきであろう。――九月七日記――

（まきの かずお・実践女子大学教授）